

1. 体験学習をすすめるにあたって

● 「ふだんの 暮らしの しあわせ」を考える教育

福祉教育は、子どもたちが身のまわりの人々や地域との関わりを通して、そこにどのような福祉課題があるかを学び、その解決に向けて考え、行動する実践力を養うことを目的としています。

しかし、学習のねらいが曖昧なまま、車いす体験や高齢者疑似体験などを実施し、「体験すること」が福祉教育の目的となってしまう現状も見受けられます。「老いる」とはどんなことなのか、「障害」とは何か、というような問いかけを、体験を通してより具体的に考えることが重要です。

● 子どもたちの日常生活と結びつける

体験においては、子どもたちの普段の生活に関わりのある場所やものを用いることで、より多くの気づきが得られます。いつも通ったり使用する歩道の傾きやちょっとした段差、置いてあるものの高さなど、普段何気なく歩いたり見たりしているものを、体験を通して身をもって体感することができます。

例：校舎内（教室、廊下、トイレ、水道等）、校舎周りや登下校する通学路、最寄りの商店等

● 当事者の方や地域の方に協力してもらう

地域にはいろいろな方々が生活しています。福祉教育においては、実際に地域に住んでいる人との関わりが重要なポイントとなります。

子どもたちが身のまわりの人々や地域との関わりを通して、地域に住むさまざまな人々の生活に触れ、そこにはどのような工夫があるのか、またどのような生活課題、福祉課題があるのかを学ぶことが重要です。

しかし、学校の授業として取り組む場合、時間の制限や危機管理等の問題から自由に外に出ることが難しい場合が多々あります。地域によっては、子どもたちが外に出て体験する際に地域の方々に子どもたちを見守ってもらったり、付き添ってもらったりと、さまざまな場面で地域の方々にサポートしていただいているところもあります。福祉教育を進めるにあたっては、地域の方々と協力しながら学習をすすめていくことも大切です。

● 疑似体験はきっかけの1つ。一歩間違えると落とし穴に・・・

福祉教育における疑似体験は、あくまで「気づき」や「きっかけ」の導入の1つであり、一方的な知識定着や対象理解、技術習得が第一の目的ではありません。

福祉教育における疑似体験でもっとも危険なことは、安易な体験の実施により、子どもたちを「わかったつもりにさせてしまう」落とし穴に落としてしまうことです。

疑似体験では、子どもたちが車いすに乗ったり、高齢者疑似体験用具を装着したり、アイマスクを着用してブラインドウォーク体験をしたりすることで、障害のある人たちの生活の一部を疑似体験しますが、それはあくまでも疑似であるということを伝えることが大切です。

● 福祉教育の本来の目的を確認

一方的な疑似体験では、「大変だった」、「怖かった」、「不便だった」というようなマイナス面のみの感想が述べられ、「大変だから手伝いましょう、優しくしましょう」というまとめ、また感想文にとどまってしまいます。これでは、本来の福祉教育の意図とは大きく外れてしまいます。

点字や手話の学習も、それ自体を覚えることが第一の目的ではなく、耳の聞こえない、目の見えない（障害のある）人とコミュニケーションを図ることが本来の目的であるはずです。

● ふり返りを意識した展開を

子どもたちが体験を通して得た気づきや疑問を、丁寧にふり返り、深めることで、子どもたちにとって身近な地域課題・生活課題と結びつけ、それに対して「自分たちには何ができるのか」、「解決していくためにはどうすればいいのか」を子どもたち自身が考え、行動していく実践力を養うことではじめて疑似体験はその意味を成すともいえます。

体験のための体験にならないように、体験での学びを活かして、自分たちにできることは何かを子どもたち自身が考える過程が大切です。

この実践編の中では、福祉教育における取り組みのヒントをいくつかご紹介しています。いろいろなことに「気づいたり」「感じたり」「考えたり」するきっかけの一つとしてご活用ください。

2. 車いす編

(1) 車いすに乗っている人に出会ったら

自走式の車いすの方、電動車いすの方、介助者に車いすを押してもらおう方と、車いすを利用する方もいろいろです。

① 車いすの人が街で困っていたら、まず声をかけましょう

車いすの方と話をするときは、相手と同じ目線での会話を心がけましょう。また、車いすだからといって、必ずしもすべての人が介助を必要としているわけではありません。相手の気持ちをよく確かめてから必要なことを手伝いましょう。

② どのように介助して欲しいか本人の意思を尊重しましょう

見かけが同じであっても、その種類や程度は十人十色です。できるだけ本人の望む方法でお手伝いしましょう。

③ わからないことはやらず、無理をしない

無理なお手伝いは大きなけがにつながります。安全第一を心がけましょう。自分一人でできそうにない場合は、無理せず、周囲の人に声をかけて手伝ってもらいましょう。

④ 服装に注意

介助するときはできるだけ軽装で、スカート、ハイヒールは避け、相手を、また自分自身を傷つけないようアクセサリー(指輪、ブローチ等)や腕時計もはずしましょう。

⑤ ブレーキは必ずかけましょう

車いすに乗り降りする時や、少しの間でも止める時は、必ずブレーキをかけておきましょう。平坦に見える歩道でも、実際は傾斜があることも多く、大きな事故の原因になります。

⑥ 車や通行人にも注意しましょう

横断歩道や踏切を渡る時は細心の注意を払い、信号の点滅時や警報機が鳴り出したら絶対に渡らないようにしましょう。

2. 車いす編

(2) お手伝いのポイント、気をつけること

介助をはじめるとき

1. 車いすの真後ろに立ち、両手でハンドグリップを深く、しっかりと握ります。
2. 押すときは、「押しますよ」と声をかけてから、押しはじめてください。
3. 前後左右に注意して、ゆっくり押ししていきます。
4. 車いすを使用する人には上半身の力の弱い人もいますので、階段や下り坂等で前かがみになる場合は、ずり落ちないように注意して介助しましょう。

注意！

- ・乗車した状態の車いすを止めたままにするときは、必ずブレーキをかけてください。
- ・急な斜面では、乗車した状態で車いすを止めないでください。
- ・車いすから手を離すときは、必ずブレーキがかかっていることを確認してください。
- ・車いすを使用する人には下半身の感覚がない人が多くいますので、足をどこかにぶつけてけがをすることがあります。動き出す前に、フットレストに足が乗っているか必ず確認してください。

人ごみの中で

人ごみの中で介助をするときに注意することは、車いす使用者のつま先が前にいる人にぶつからないようにすることです。これは介助者が車いすと前にいる人との距離がつかみにくいことが原因です。



高齢者などを介助するときには

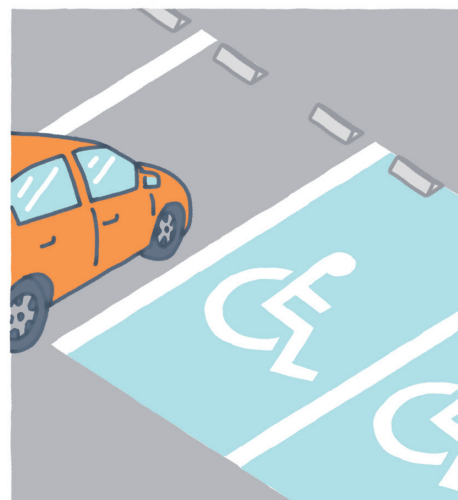
車いす使用者が高齢者の場合は、手の位置・足の位置に気をつけましょう。「押しますよ」と声をかけても自分で動かそうとしてハンドリムをもったままの場合があります。そのまま車いすを押してしまうと手をはさんでしまう危険があります。

また、最初は平気でも、押ししているうちに手をハンドリムに乗せてしまうこともあります。さらに、足の位置(フットレストにきちんと乗っているか)も同じく気を配っておく必要があります。

駐車場での思いやり

車いす利用者は、駐車場スペースに駐車し、ドアを大きく開け、車いすの積み下ろしを行い、車に乗り降りしています。

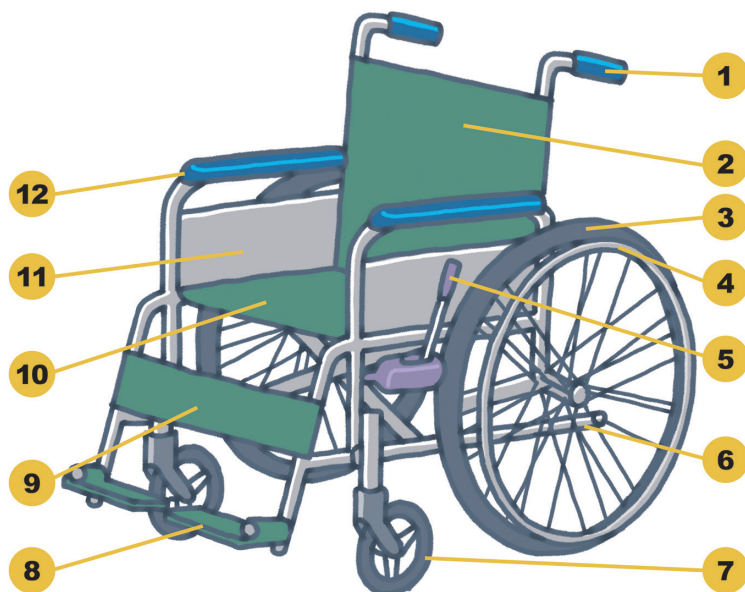
障害のない方は、障害者用駐車スペースには駐車しないようにしましょう。



2. 車いす編

(2) お手伝いのポイント、気をつけること

① 車いすの各部位の説明



- ① ハンドグリップ……………介護者用のにぎり
- ② バックレスト……………背もたれ
- ③ 大車輪……………後輪
- ④ ハンドリム……………ここに手をかけ車輪を回す
- ⑤ ブレーキ……………停車中に走り出さないためのもの
- ⑥ ステッピングバー……………介助者がキャスター上げをする時に使う
- ⑦ キャスター……………前輪、空気入りのものもある
- ⑧ フットレスト……………足をのせる部分
- ⑨ レッグレスト……………足が後ろへ落ちないように
- ⑩ シート……………クッションをのせて使うことが多い
- ⑪ スカートガード……………衣服等が外へ落ちないように
- ⑫ アームレスト……………ひじかけ、取り外し式もある

2. 車いす編

(2) お手伝いのポイント、気をつけること

② 基本的な操作方法

● ひろげ方



〈1〉ブレーキをかける。
外側に少し開く。

〈2〉両手をシート面に
あてて、押しひろげる。

〈注意〉このようにシートの横に
手を入れると指をはさまれます。

ひろげる時の手の向き



手を外側に向けた
ままだと指を挟んで
しまう危険がある。



内側に向けていれば
指は挟まない。

● たたみ方

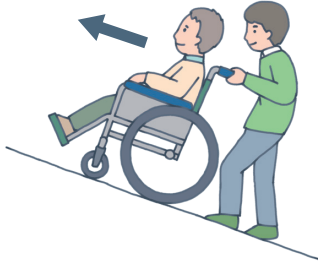


〈1〉ブレーキをかける。フットレスト(足台)を上げる。

〈2〉シートを持ち上げる。

〈3〉完全におりたたむ。

● 坂を上る



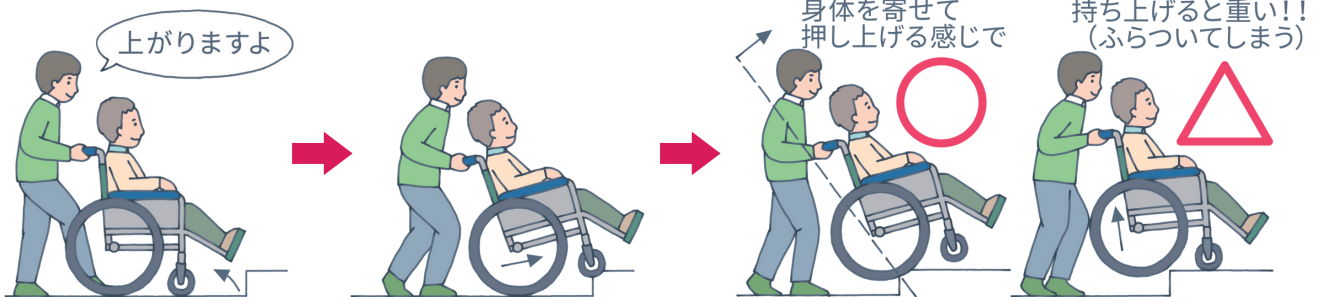
車いすの後ろから身体を前傾し、
1歩1歩確実に押す。

● 坂を下る



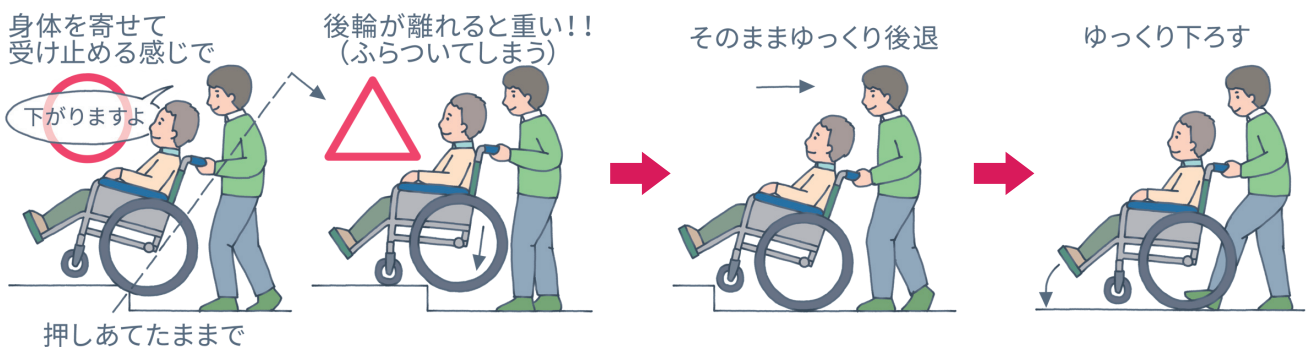
〈1〉急な坂は、万が一すべっても大丈夫なように介助者は後ろで車いすを支え、自分の足下を確認しながら、後ろ向きに下りる。
〈2〉平らになったら向きを変える。

● 段差を上がる ※車いすは「前向きで上がりますよ」と声をかけてから



〈1〉段の手前でステップバーに体重をかけ、
手でハンドグリップを手前に引いて、キャスト（前輪）を上げる。
〈2〉キャストを上げたまま前進し、段の上にそっと前輪をおろす。
〈3〉後輪が段にぶつかったところでハンドグリップを持ち上げるようにしながら前に押す。

● 段差を下りる ※車いすは「後ろ向きで下りますよ」と声をかけてから



〈1〉ハンドグリップをしっかり握り、後輪を段に沿って下ろす。
ハンドグリップを持ち上げながら下ろすとかなりの力が必要。
〈2〉キャスト（前輪）を上げたまま後ろに引く。
〈3〉フットレスト、足のつま先が段差に当たらないよう注意してキャストを下ろす。

注意!

- ・車いすの人の足先が段にぶつからないように注意して介助しましょう。
- ・前向きではなく必ず後ろ向きで下りましょう。
- ・介助者がまずきちんと下りてからゆっくり後輪を下ろしましょう。
- ・ステップバーに足をかけ体重をかけながらゆっくり前輪を下ろしましょう。

2. 車いす編

(3) 体験プログラム例

① 基礎編

目的 車いすの基本的な操作、介助方法を学ぶ

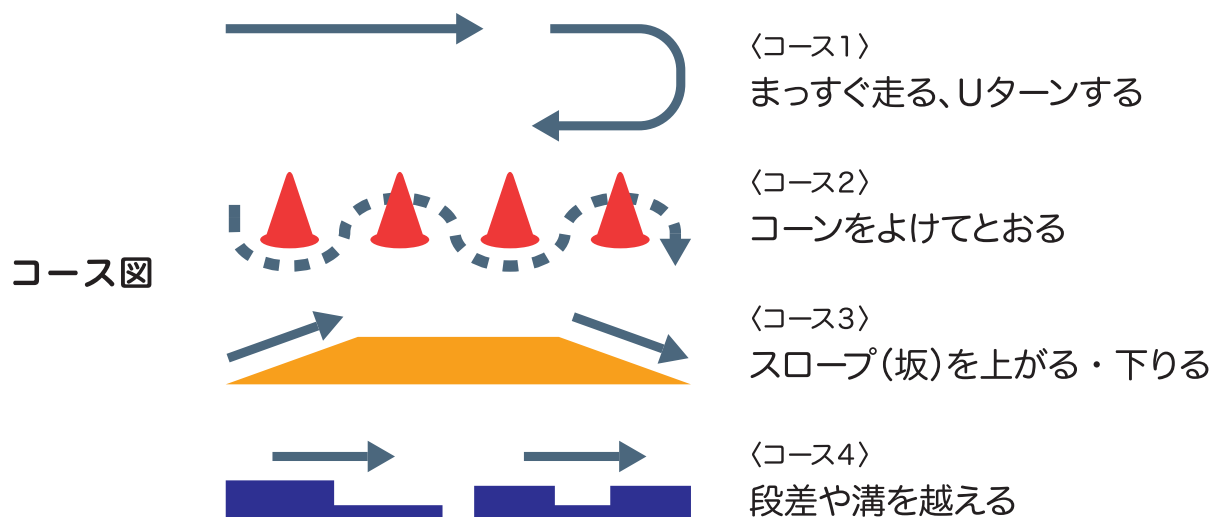
ポイント 車いすを使っている人の気持ちになって体験してみよう

場所 体育館など、学校内の広い場所をえらぶ

準備 車いす、コース図、ワークシート、
障害物：コーン、マット、ふみきり板など

活動内容

- 1, 車いすのつくりやどのような使い方をするかについて知る。
- 2, ひろげ方とたたみ方、ブレーキのかけ方を知り、やってみる。
- 3, 車いすに乗り、コース図を見ながら自分で動いてみる。
- 4, 人を乗せ、介助してみる。
- 5, ワークシートに気づいたことや感じたことなどを書きとめておく。



2. 車いす編

(3) 体験プログラム例

② その他

目的 自分たちの街は、車いすにやさしい街か考えよう

場所 自分たちの学校のある地域

準備 学校のまわりの地図(2500分の1程度)、ラインマーカー(3色)、グループづくり(1グループ5~6人)

活動内容

- ①調査する場所をよくたしかめ、グループごとに担当ブロックの調査を行う。
- ②調査は車いすに乗って行う。
- ③調査が終わったら、教室にもどり、担当ブロックの車いすマップをつくる。
- ④全部のマップを貼り合わせ、学校のまわりの車いすマップを完成させる。
- ⑤学習したことをレポートにまとめる。

グループづくり

- ・学校区域を数ブロックに分け、1つのグループが1つのブロックを担当する。
- ・自分の担当しているブロックについて、1人が1つのテーマをえらんで調べる。
- ・グループごとに作ったマップを貼り合わせて、1枚の車いすマップを完成できるよう、あらかじめ調査項目の略号(例：スロープがあったところは㊷など)を決めておく。

調査する内容・場所

- 1, 主な調査内容
 - ・車いす用のスロープの有無
 - ・車いすでも利用できる水道・自動販売機の有無
 - ・段差があって車いすだと1人で通れない場所
 - ・交通量が多いのに歩道がないところ
 - ・エレベーターの有無と広さ(中で車いすがターンできるか)
 - ・入り口の広さ・ドアの開閉状況 など
- 2, 主な調査場所
 - ・学校を中心とした道路状況
 - ・役場、老人福祉センター、図書館などの公共施設
 - ・コンビニ、スーパーマーケット、デパートなど人が多く利用する場所 など

他にも…

- ・施設で生活している高齢者や障害者の人たちと車いすで散歩する。
- ・車いすで働いている人たちの様子を知る。
- ・車いすバスケットボールチームや、車いすダンス、チェアスキーなど、車いすスポーツに触れてみる。

3. 視覚障害編

(1) 目の不自由な人に出会ったら

目の不自由な方には、生まれつき全盲の方、弱視の方、中途失明の方、目と耳に障害のある方など、いろいろな視覚障害の方がいます。

こんにちは
はじめまして



① 初めて会ったときには握手を

「私は〇〇の△△です」と声をかけてください。見える人から軽く握手をしてください。握手されると相手がどの方向にいるか、また、背の高さがどれ位かわかり、見当違いの方向を向く失礼が避けられます。

② 誘導するときは腕や肩をかして半歩前を

誘導するときは、相手に肩から肘の間で持ちやすいところを軽く握ってもらいます。つかまった手を通して相手の身体の動きがよくわかり、安全に歩くことができます。また、歩く時は、誘導する人が誘導される人の半歩前にいてください。

③ 杖や手には急に触れない

目の不自由な人は、歩行中にアンテナの役割をしている白杖や手を急に引っ張られたり、腕を抱きかかえられたり、後ろから身体を押さえられたりすると大変不安に感じますし、危険ですので注意しましょう。

④ 物の位置は時計の文字盤に例えましょう (クロックポジション)

物の位置や食事の案内などは、3時の方向にパン、6時の方向にサラダ、9時の方向にコーヒーといった具合に、時計の文字盤の位置で指示してください。



⑤ 道などを聞かれたときは正確（具体的）に

目の見えない人の立場に立って説明しましょう。「向こう」「あっち」などのような抽象的な表現は使わず、立っている場所を中心に「前へ何歩」「右へ何メートルの所」というように具体的・正確に伝えましょう。

⑥ 食事の際には料理の説明も

食事は楽しみながらしたいものです。器にそっと触れさせてあげると、形や大きさがわかります。また、色や模様などを説明してあげると、より楽しい食事になります。なお、お茶をいれかえたときなどは、位置を変えないように置いてください。

また、席をはずすときはだまって席を立たれると、いなくなった人に話しかけることがありますので、「ちょっと席をはずします」とひと声かけてください。

ちょっと
席をはずします



3. 視覚障害編

(2) 基本的な姿勢・誘導のポイント

● 歩く

介助する人は、介助を受ける人の半歩前に立ち、肩から肘の間で持ちやすいところを軽く握ってもらいます。

①歩く速さは、介助を受ける人に合わせてください。

②歩くときは、まわりの様子などを説明しながら歩いてください。曲がったり、立ち止まったりするときは、あらかじめ声をかけましょう。

③前方に障害物や段差があるときは、具体的に「〇〇メートルほど前に〇〇がありますよ」と声をかけてください。

④狭いところ、混雑しているところでは、介助をする腕を後ろにまわし、介助をする人が前に立って一列に並んで進みます。

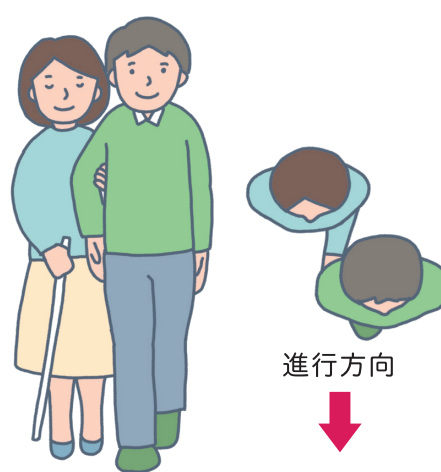
腕のつかみ方



基本姿勢



狭いところの場合



● 悪い誘導例

①手と手をつかむと体が離れてしまい、案内される人は不安になります。

②後ろ側から持つと介助される人が前に出てしまい、介助する人が後ろで案内することになってしまいます。

③腕を組むと介助される人が前に出てしまい、介助する人が後ろで案内することになってしまいます。

● ドア・戸

開きドアの場合は、形式（手前に引く等）を説明し、ドアの取っ手側に介助する人、蝶番側に介助を受ける人が立つ。「開けます」と声をかけドアの取っ手を手前に引きながら2人とも後ろへさがり、「通ります」と声をかけゆっくり通過する。その際、ドアへの衝突を避けるため介助を受ける人の手をドアの縁に導く。

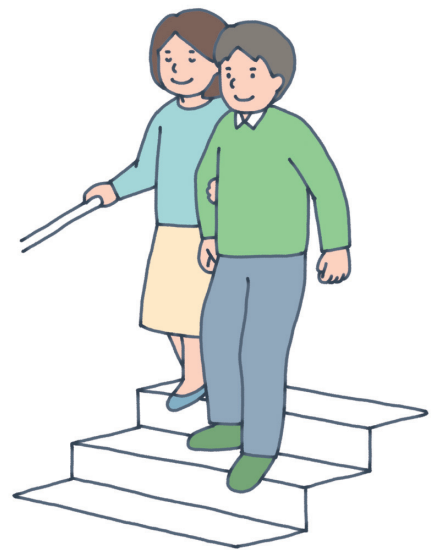
引き戸の場合は、形式（右横に引く等）を説明し、戸の取っ手側に介助する人、戸袋側に介助を受ける人が来るように立つ。「開けますよ」と声をかけ戸の取っ手を横に引きながら、「通りますよ」と声をかけゆっくり通過する。その際、戸への衝突を避けるため介助を受ける人の手を戸の縁に導く。

● 階段

階段では直前で立ち止まり、「階段です。上がります（下ります）」と声をかけ、介助する人は、介助を受ける人に足先で段を確かめてもらい、一段進んだときに介助を受ける人の足が最初の段にかかるのを確認してからゆっくり進みます。手すりがある場合は、手すりの状況やまわりの様子を伝え、どういう通行方法がよいのかを聞いてください。

踊り場や次の階に到着し階段が終わるときは、「この段で終わりです」と声をかけてください。

エスカレーターに乗る場合は左手がベルトにかかるようにし、下るときは、ベルトの動きで乗り切ったかどうか自分で判断できます。このとき、介助者は一段下に乗ってください。



● トイレ

トイレの利用は、介助を受けている側から言い出しにくいので、「トイレはいかがですか」、「私も行きたいので、一緒にどうですか」など、さりげない配慮が望めます。

トイレに入り、手洗いの位置を説明し、ブース（便房）の入り口まで誘導する。ブース内の設備（便器の形式、トイレットペーパー、水洗レバーの位置など）について説明してください。ペーパーやレバーの位置は実際に手を導いて説明しておくことが望めます。

介助する人は「終わったら呼んでください」と声をかけ、手洗い場付近で待ち、介助を受ける人が方向がわからない場合は介助しながら、水道の取っ手へ導きます。



知っておいて欲しいこと

介助する人と介助される人が、常に同姓であるとは限りません。女性が男性トイレに、男性が女性トイレにそれぞれ案内する場合もあるということを知っておいてください。

● いすに座る

いすへの着席は、介助を受ける人の手を背もたれに触れさせ「いすの背もたれです」と声をかけてください。

丸いすの場合は、座るところに触れさせ、丸いすであることを告げてください。



● 車の乗り降り

①介助をする人がドアを開け、介助を受ける人の手を開いたドアの上の縁に導きます（座席の方向がわかる）。次に、介助を受ける人の手を屋根に触れさせ（車の高さがわかる）、座席の端に腰をかけてから足を車内に入れて奥に入ります。介助をする人は、後から乗車しドアをしめます。



②車が停車したら、介助する人が先に降ります。介助を受ける人は、足から外に出し、片手を開いているドアの上に置き、座席から離れます。介助する人は、すぐに手をとって介助する体勢をとります。

● 支払い

原則としてお金の扱いは本人にしてもらいます。支払いを頼まれたときは、渡された金額を声をだして支払い、お釣りの額も紙幣と硬貨でそれぞれ種類別に説明しながら渡すとわかりやすいでしょう。



3. 視覚障害編

(3) 体験プログラム例

① ブラインドウォーク

ブラインドウォーク(アイマスクをつけた歩行)を行うことで、目の見えないことを体験し、目の不自由な人の身になって考えたり、進んでガイドしたりする態度を身に付けましょう。

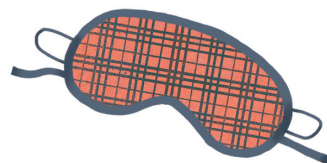
体験のポイント

2人1組になり、1人がガイド役もう1人がアイマスクをつけて歩いてみる。

体験例：いすに座る、立ち上がり動作、机の引き出しから物を取り出す、室内での移動、ドアの開閉、廊下の通行、階段、エレベーター、点字ブロック、段差、公衆電話、自動販売機の利用、道路(歩道の幅・舗装状態・障害物、車道と歩道の違い、音響式信号機の方角・音の大きさ・時間、自動車の騒音)など。

アイマスクのつけ方

雑菌等から目を守るために、ティッシュペーパーやガーゼを内側にあてて使用しましょう。周囲や足下が見えないように、また、ずり落ちたりしないようにしっかり取り付ける。メガネは外してからつけましょう。



目的 目の不自由な人の身になって考え、進んでガイドする態度を身につけよう

場所 教室、玄関から校庭

準備 アイマスク(生徒数の半分)、
ガーゼ・ティッシュ(アイマスクの内側にあてる)

活動内容

活動例

- ①目の不自由な人のためにどんな施設や設備があるか、目の不自由な人がどんな生活用具(白杖、点字器、盲導犬)を使っているかなど、事前に調べて話し合う。
- ②目を閉じて、机の引き出しから教科書やノートを出してみる。
- ③目を閉じて、自分の席から教室の黒板の所まで歩いてみる。
- ④2人組になり、1人がガイドし、もう1人がアイマスクをして、玄関から段差やスロープのある所、フェンス際などを通して校庭を1周して来る。
- ⑤アイマスクをして歩いた時と、ガイドした時の両方の立場から感想を発表しあう。

3. 視覚障害編

(3) 体験プログラム例

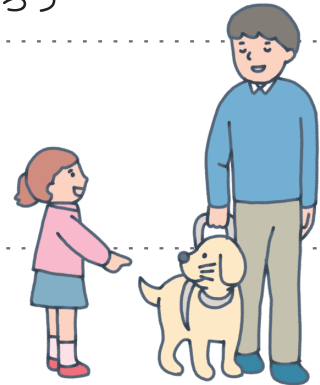
② その他

視覚障害者を取り巻く環境を知ろう

目的 盲導犬についてもっとよく知ろう

準備 テレビなどマスコミでもたびたび取り上げられる盲導犬について調べ、目の不自由な人、福祉とその環境についてもっと知ろう

活動例
活動内容 1. 盲導犬の歴史、諸外国の事情、育て方、盲導犬を取り巻く現在の社会環境などグループごとに調べ発表する。



視覚障害者と交流しよう

目的 目の不自由な人たちのことをもっとよく知ろう

場所 学校・社会福祉施設

活動例
活動内容 1. 盲学校の生徒や盲老人ホームの方々と交流する。
2. 盲導犬を使用している人の話を聞く。

白杖について

「目の見えない・見えにくい」人が持つ道具で、①「目の見えない・見えにくい」人が、それを使って障害物や路面の状態などを知るための役割と、②周囲の人に「見えない・見えにくい」ことを知らせるための役割があります。

コラム：ガイドヘルパーとは

主に障害のある方に対して外出時の移動の介護・支援等、外出時の付き添いを専門に行います。障害者の外出支援とは単に障害者を目的地まで支援するのではなく、外出により社会参加、自己実現の支援をします。

3. 視覚障害編

(4) 点字

① 点字について

点字の紹介

点字は 1800 年ころに戦争で兵士の間で暗号として使われていたものを触読しやすいように改良したものです。1825 年、フランス人で目の不自由なルイ・ブライユによって現在の点字が考案されました。

その後世界各国に広がり、日本では東京盲啞学校（現在の筑波大学付属盲学校）の教員、石川倉次によって、日本語の 50 音に当てはめられました。

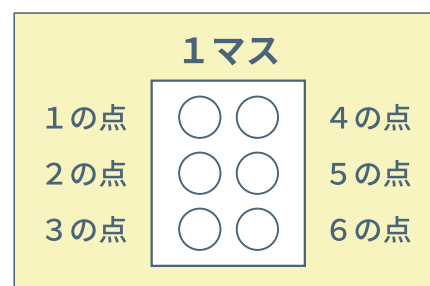
最近では、エレベーターのボタンや券売機などにも点字の表示がされるようになりました。

点字のしくみ

マス(6つの点)について

点字は全て、タテ3点・ヨコ2点の計6点で表されます。

凸面から見て、左上の点を「1の点」、左中を「2の点」、左下を「3の点」と呼び、同じように右上、右中、右下をそれぞれ「4の点」、「5の点」、「6の点」と呼びます。

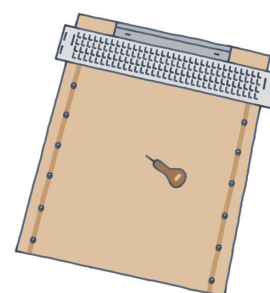


点字器と点筆

点字を「書く」場合は通常、点字器と点筆を使います。

板に点字用紙を挟んで、その用紙を定規の間に入れて、点筆で紙を押しながら裏側に凸面を作っていきます。書く場合は右から左へと書いていきます。

点字プリンターやタイプライターもあります。



コラム：点字の識字率

「平成 18 年身体障害児・者実態調査結果報告」によると、視覚障害の方の点字習得状況で「点字ができる」と答えた者は 12.7%という調査結果が出ており、視覚障害の方が必ずしも全員点字を使えるわけではありません。

➡ 点字についてもっと知りたい場合は、群馬県立点字図書館へ
<http://www.guntento.org/index.htm>

3. 視覚障害編

(4) 点字

② 点字の書き表し方

①点字は6つの点で作られた1マスで一つの文字を表します。しかし63通りの文字しか作れないので、濁音(=にごる音)などは2マスで一つの文字を表すこととなります。その時、あてはまる文字の前に「次は濁ります」ということを知らせる点字記号を書きます(点字は左から右へ1マスずつ読んでいくので、最初にお知らせが必要)。

②点字は字の大きさを変えることができないので墨字のような小さな「や、ゆ、よ」や小さな「っ」を書くことができません。拗音の「きゃ、きゅ、きょ」や「しゃ、しゅ、しょ」などは、「か、く、こ」「さ、す、そ」が変化したものなので、その音の前に「次は拗音です」という記号の点字をつけて、2マスで表します。

③点字にはひらがなとカタカナの区別がありません。もちろん漢字もなく、全部かな文字で書き表します。

④言葉のあとにつける「を」はそのまま「を」を使いますが、「は」「へ」は、発音どおり「わ」「え」と書きます。

例)わたしは→わたしわ 本屋へ→ほんやえ

⑤のばす音で、墨字で「う」と書くところは、のばす記号の長音符を書きます。

例)空気→くーき 王様→おーさま 運動しよう→うんどーしよー
きのうのように→きのーのよーに

⑥のばすように聞こえる音でも「あ」「い」「え」「お」は墨字と同じように書きます。

例)お母さん→おかあさん お兄さん→おにいさん 通→とおる

⑦数字にはア行とラ行の10文字が使われるため、かなと数字を区別しなければなりません。そのため、書きたい数字の前に「今から数字が始まります」と知らせる数符を書きます。数字が終わったあと、ア行とラ行の文字があとに続く場合には、数字とかなを区別するために、その間に第1つなぎ符を入れます。

⑧句点(.)、疑問符(?)、感嘆符(!)第1カギ「」、第1カッコ()などを表す点字記号も用意(点字記号表)されています。

⑨点字を書くときは、ことばのまとまりごとにマスをあけなければなりません(文の書きはじめと行変えのはじめは、2マス)。

⑩点字には消しゴムがないため、間違えたら点を指先でつぶして、その上から正しい点字を打ってください。

③ 点字一覧表 (凸面用)

● 五十音

| | | | | |
|----|----|----|----|----|
| あ | い | う | え | お |
| ●○ | ●○ | ●● | ●● | ○● |
| ○○ | ●○ | ○○ | ●○ | ●○ |
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ |
| か | き | く | け | こ |
| ●○ | ●○ | ●● | ●● | ○● |
| ○○ | ●○ | ○○ | ●○ | ●○ |
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ |
| さ | し | す | せ | そ |
| ●○ | ●○ | ●● | ●● | ○● |
| ○○ | ●● | ○○ | ●● | ●● |
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ |
| た | ち | つ | て | と |
| ●○ | ●○ | ●● | ●● | ○● |
| ○○ | ●● | ○○ | ●● | ●● |
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ |
| な | に | ぬ | ね | の |
| ●○ | ●○ | ●● | ●● | ○● |
| ○○ | ●○ | ○○ | ●○ | ●○ |
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ |
| は | ひ | ふ | へ | ほ |
| ●○ | ●○ | ●● | ●● | ○● |
| ○○ | ●○ | ○○ | ●○ | ●○ |
| ○○ | ●● | ●● | ●● | ●● |
| ま | み | む | め | も |
| ●○ | ●○ | ●● | ●● | ○● |
| ○○ | ●● | ○○ | ●● | ●● |
| ○○ | ●● | ●● | ●● | ●● |
| や | | ゆ | | よ |
| ○● | | ○○ | | ○● |
| ○○ | | ○○ | | ○○ |
| ●○ | | ●● | | ●○ |
| ら | り | る | れ | ろ |
| ●○ | ●○ | ●● | ●● | ○● |
| ○○ | ●● | ○○ | ●● | ●● |
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ |
| わ | を | ん | っ | ー |
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ |
| ○○ | ○○ | ○○ | ●○ | ●● |
| ○○ | ○○ | ●● | ○○ | ○○ |

● 拗音・濁音・半濁音

| | | | | | |
|------|------|------|------|------|------|
| が | ぎ | ぐ | げ | ご | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●● | ○○●● | ○○○● | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | |
| ざ | じ | ず | ぜ | ぞ | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●● | ○○●● | ○○○● | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | |
| だ | ぢ | づ | で | ど | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●● | ○○●● | ○○○● | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | |
| ば | び | ぶ | べ | ぼ | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●● | ○○●● | ○○○● | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | |
| ぱ | ぴ | ぷ | ぺ | ぽ | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●● | ○○●● | ○○○● | |
| ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | ○○●○ | |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | |
| きゃ | きゅ | きょ | ぎゃ | ぎゅ | ぎょ |
| ○●●○ | ○●●● | ○●●○ | ○●●○ | ○●●● | ○●●○ |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| しゃ | しゅ | しょ | じゃ | じゅ | じょ |
| ○●●○ | ○●●● | ○●●○ | ○●●○ | ○●●● | ○●●○ |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| ちゃ | ちゅ | ちょ | ぢゃ | ぢゅ | ぢょ |
| ○●●○ | ○●●● | ○●●○ | ○●●○ | ○●●● | ○●●○ |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| にゃ | にゅ | にょ | びゃ | びゅ | びょ |
| ○●●○ | ○●●● | ○●●○ | ○●●○ | ○●●● | ○●●○ |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| ひゃ | ひゅ | ひょ | ぴゃ | ぴゅ | ぴょ |
| ○●●○ | ○●●● | ○●●○ | ○●●○ | ○●●● | ○●●○ |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● | ○○○● |
| みゃ | みゅ | みょ | | | |
| ○●●○ | ○●●● | ○●●○ | | | |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | | | |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | | | |
| りゃ | りゅ | りょ | | | |
| ○●●○ | ○●●● | ○●●○ | | | |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | | | |
| ○○○● | ○○○● | ○○○● | | | |

③ 点字一覧表 (凸面用)

● 数字

| 数府 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 0 | 少数点 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| ○● | ●○ | ●○ | ●● | ●● | ●○ | ●● | ●● | ●○ | ○● | ○● | ○ |
| ○● | ○○ | ●○ | ○○ | ○● | ○● | ●○ | ●● | ●● | ●○ | ●● | ●○ |
| ●● | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ |

● アルファベット

| a | b | c | d | e | f | g | h | i | j | k | l | m |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ●○ | ●○ | ●● | ●● | ●○ | ●● | ●● | ●○ | ○● | ○● | ●○ | ●○ | ●● |
| ○○ | ●○ | ○○ | ○● | ○● | ●○ | ●● | ●● | ●○ | ●● | ○○ | ●○ | ○○ |
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ●○ | ●○ | ●○ |

| n | o | p | q | r | s | t | u | v | w | x | y | z |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| ●● | ●○ | ●● | ●● | ●○ | ○● | ○● | ●○ | ●○ | ○● | ●● | ●● | ●○ |
| ○● | ○● | ●○ | ●● | ●● | ●○ | ●● | ○○ | ●○ | ●● | ○○ | ○● | ○● |
| ●○ | ●○ | ●○ | ●○ | ●○ | ●○ | ●○ | ●● | ●● | ○● | ●● | ●● | ●● |

| 外字府 | 大文字府 | ピリオド(.) | ハイフン(-) | コロん(:) | セミコロん(;) | コンマ(,) |
|-----|------|---------|---------|--------|----------|--------|
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ |
| ○● | ○○ | ●● | ○○ | ●● | ●○ | ●○ |
| ○● | ○● | ○● | ●● | ○○ | ●○ | ○○ |

● 記号類 (主なものを抜粋)

| 句点(.) | 読点(、) | 疑問符(?) | 感嘆符(!) | 中点(・) | 波線(~) | 棒線(—) |
|-------|-------|--------|--------|-------|-------|-------|
| ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○ | ○○○○ | ○○○○ |
| ●● | ○● | ●○ | ●● | ○● | ○○○○ | ●●●● |
| ○● | ○● | ○● | ●○ | ○○ | ●●●● | ○○○○ |

| 第1つなぎ府 | 第2つなぎ府 | 点線(…) |
|--------|--------|--------|
| ○○ | ○○○○ | ○○○○○○ |
| ○○ | ○○○○ | ●○○●○○ |
| ●● | ○●●○ | ○○○○○○ |

| 右向き矢印(→) | 左向き矢印(←) | 両向き矢印(↔) |
|----------|----------|----------|
| ○○○○●○ | ○●○○○○ | ○●○○○○●○ |
| ●●●●○● | ●○●●●● | ●○●●●●○● |
| ○○○○●○ | ○●○○○○ | ○●○○○○●○ |

| 第1カギ「」 | 第1カッコ() | 二重カギ『』 |
|---------|----------|---------------|
| ○○ ○○ | ○○ ○○ | ○○○○ ○○○○ |
| ○○ ~ ○○ | ●● ~ ●● | ○●○○○ ~ ○○○●○ |
| ●● ●● | ●● ●● | ○●●●● ●●●● |

| % | & | # | * |
|------|------|------|------|
| ○○●● | ○○●● | ○○●● | ○○●○ |
| ○●●○ | ○●●○ | ○●●○ | ○●○○ |
| ○●●○ | ○●●○ | ○●○○ | ○●○○ |

3. 視覚障害編

(4) 点字

④ 点訳ボランティア

点訳ボランティアとは、視覚に障害のある方のために、墨字(活字)で書かれている書籍や雑誌、広報誌、新聞などの内容を“点字にして伝える”ボランティアです。

視覚障害者にとっての、触る文字である点字は、生活をしていく中で情報を得るための大切なツールです。点字には一定のルールがあり、それに則って、ときには必要な言葉を補い正しく点字に直すことがとても重要です。

現在、公共施設や、さまざまな商品などで点字を目にする機会が多くなりましたが、生活に根ざした点字というものはまだまだ不足しています。そこで、私たちが目で読み得る情報を正しく点字に直し、同じ情報を提供するために活動しているのが点訳ボランティアです。

点訳ボランティアは、点訳だけでなく、点訳されたものを校正したり、点字データを編集したりと、様々な活動を行っています。(社会福祉法人日本盲人会連合 HP より)

4. 聴覚障害編

(1) 耳の不自由な人に出会ったら

聴覚障害者であることは、外見だけではわかりにくいいため、まわりの人たちは「耳が聞こえない」ことに気づかなかったり、正しく理解できないということがしばしばあります。また、ろうの方、難聴の方、中途失聴の方などいろいろで、支援方法も異なります。

① 相手に声をかけるとき

相手に呼びかけるときは、手を振るなど視野に入るような合図を送ったり、肩をトントンとたたいたりしてください。

② 自分にできるコミュニケーションを

生まれたときから聴覚障害を持っている人の場合は、「手話」を使うことが多いのですが、大人になってから突然聞こえなくなった人の場合などは、手話を知らないため、コミュニケーション方法も「指文字」や「口話」、「筆談」といったように、本人の境遇により異なります。手話等を知らなくても、携帯電話の画面や筆談等、自分にできるコミュニケーション手段を取りましょう。

③ 手話について

聴覚障害者の方々のコミュニケーションの方法として手話があります。手話は聞こえない人たちの「言葉」です。「手話教室」などもあり、簡単な手話を覚えると、コミュニケーションに役立ちます。

④ 口話について

口話は目が合ってから、正面で大きく口をあけて、ゆっくりはっきり話しましょう。むやみに大声を張り上げたり、1文字ずつ細かく区切って話すと、かえって口話での把握が困難になるため、自然に分節単位で区切りながら話してください。

伝えた内容を本人から具体的に返事をもらう、あるいは確認を促すことも大切です。

⑤ 筆談について

筆談のときは、短い文で、わかりやすく、簡潔に書きましょう。必ずしも全て書く必要は無く、キーワードや単語単位でも伝わります。

4. 聴覚障害編

(2) コミュニケーションの方法・ポイント

耳の不自由な人とのコミュニケーション手段として「手話」「指文字」「口話」「筆談」があります。その他にも、離れた相手とのコミュニケーション手段として、「ファックス」や「メール」「手紙」などがあります。

● 手話

聴覚障害者にとって最も自然なコミュニケーション手段です。

簡単な手話だけでも覚えて会話の始めや終わりに使うと、あとは口話・筆談がメインでも、よりリラックスしたコミュニケーションが可能です。

手話を勉強するには

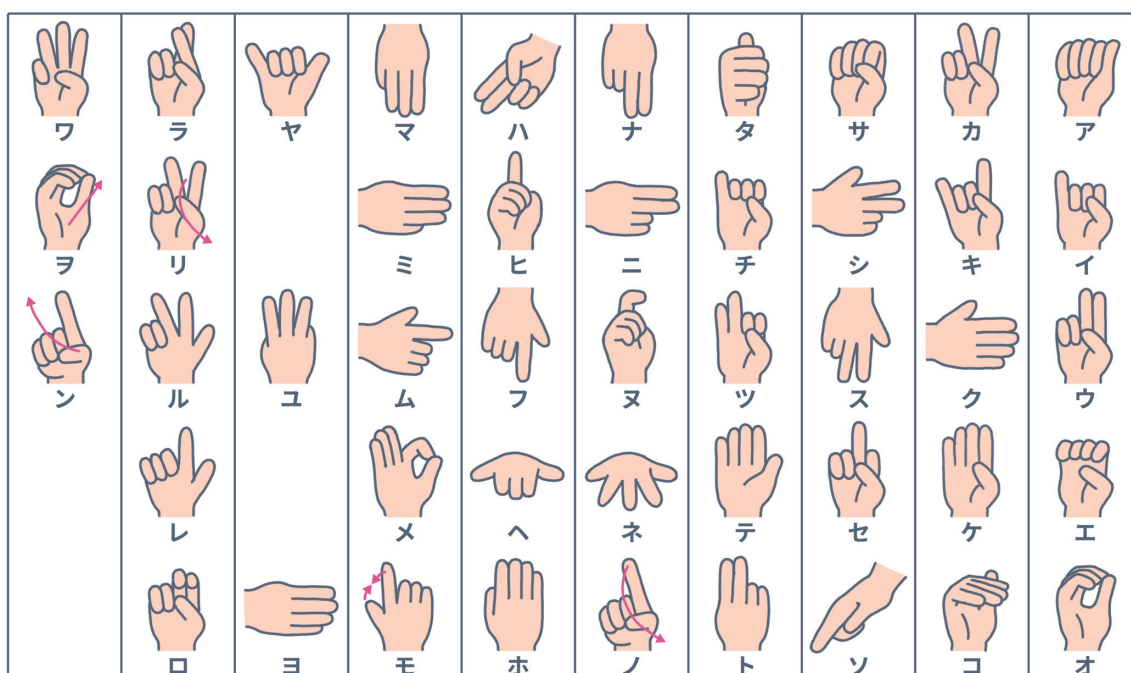
手話サークルに入り、聴覚障害者との交流を持つ。

各地域の自治体や社会福祉協議会などが主催する講習会に参加する。

教材を参考に個人で学習する。

指文字

※この図は見る人の側から書いてあります。



● あいさつしましょう



おはよう

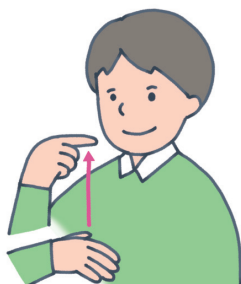


こんにちは

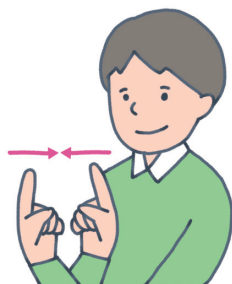


こんばんは

● 初めましてよろしくお願いします



初め



あう



良い



たのむ

● 数字の表し方

数字の表し方① (相手から見た形)



0



1



2



3



4



5



6



7



8



9

● 口話

相手の唇の動きを読みとり、話の内容を理解する方法です。

正面から口をやや大きく開いて、ゆっくりはっきり話してください。「たばこ」「たまご」「なまこ」のように口の形だけでは解読が困難な場合があるため、ジェスチャーや他の方法と組み合わせて使用することが多いです。

ポイント

唇の動きをはっきりさせ、ゆっくり話しましょう。

相手に顔を向け、口元が見えるようにしましょう。

一度話してわかりづらい場合は言いまわしを変えるなど工夫をしましょう。

● 筆談

お互いに紙などに話の内容を書き合うコミュニケーションです。必ずしも全部書く必要はなく、キーワードを書くだけでも充分情報が伝わります。

また、手元に紙がない場合は、手のひらやテーブルの上に指で書いても構いません。



ポイント

簡単でわかりやすい文章を心掛けましょう。丁寧に読みやすい字で書きましょう。

コラム：手話通訳と要約筆記

手話通訳はその場の音声言語・情報を手話変換する（または手話を音声言語・情報に変換する）方法です。

要約筆記は音声言語などの情報内容を要約して文字化する表記方法で、手書きによるものとパソコンによるものがあります。また、表記したものをスクリーンに投影して大勢の人々に見せる方法と、紙やパソコンの画面等を用いて必要とする人に対して見せる方法があります。

いずれも、耳からの情報を得られない聴覚障害者が社会の中で必要な情報を得たり、円滑にコミュニケーションを取るために必要な手段ですが、手話通訳と要約筆記とではその対象者が異なります。聴覚障害者のうち、普段から手話を使ってコミュニケーションをしている人は手話通訳を必要としますが、手話を使わない・使えない聴覚障害者は要約筆記を必要とします。

4. 聴覚障害編

(3) 難聴について

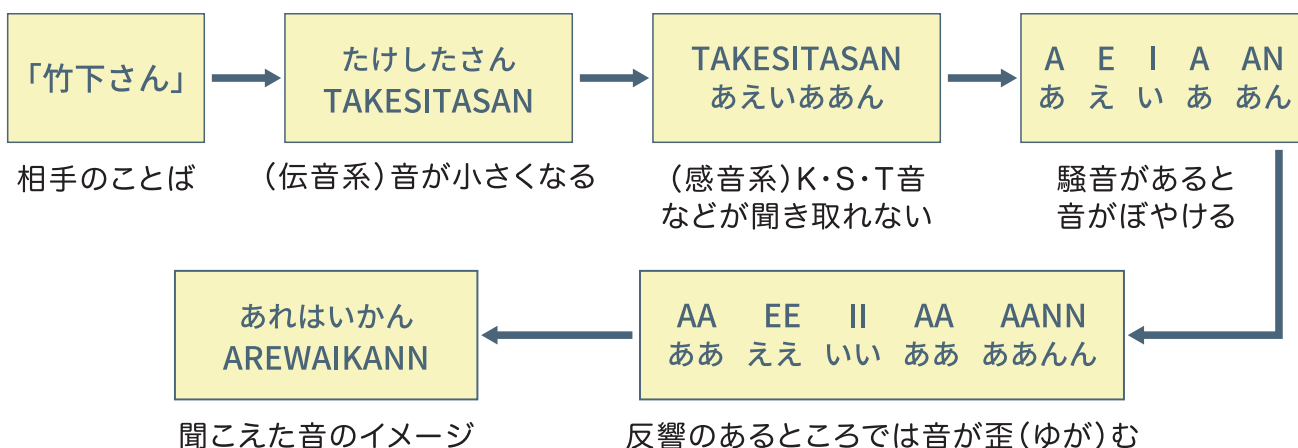
難聴はこう聞こえる？(伝音性難聴の疑似体験)

※耳栓をすると「軽度難聴」の状態を体験できます。

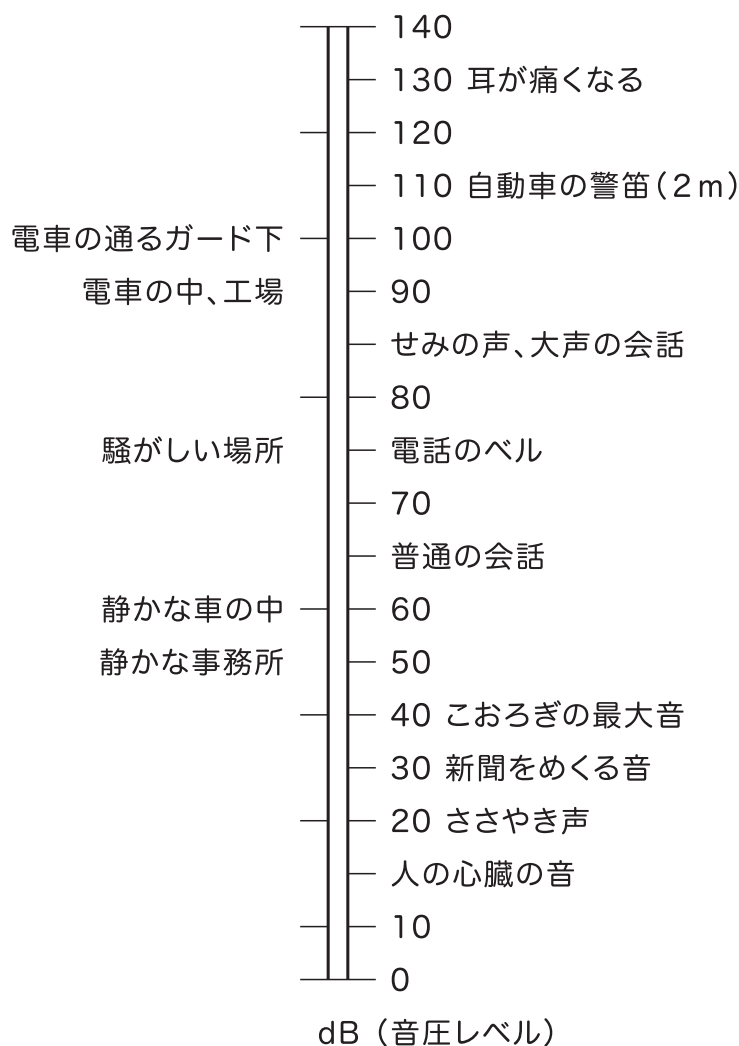
「えっ？」という高齢者の聞き返しが多くなってきたら、それは聞こえが悪くなってきたという合図です。耳も年をとるにつれその機能が衰えていきます。人の話が聞こえにくい、聞こえていても何を言っているのかよくわからない。これが“老人性難聴です”。加齢にともなうこの難聴は、単に聴力が低下するだけでなく、言葉の聞き取りが悪くなる(言語明瞭度の低下)、大きい音が響く(補充現象)が特徴です。また、コミュニケーションの障害を生じさせ、性格・行動の変化をもたらします。「何回も聞き返す」「話の内容がわからないまま相づちを打つ」「引っ込み思案になりがち」などの状態にもなります。

老人性難聴は治療によって改善することはありません。周囲の人および自分自身がこの難聴にともなって生じる性格の変化などをよく理解することが重要です。ゆっくりとわかりやすい言葉で口の動きを見せながら話すことが必要で、聞き取れない時には簡単な言葉に言い換え、大きな声で怒鳴ったりせず、近づいて話しかけましょう。

● 難聴の聞こえの模式図



● 音と聞こえ



● 難聴の程度

| 程 度 | 聴 力 レベル | 聞 こ え の 目 安 |
|---------|---------------|-----------------------------|
| 正 常 | 25dBHL以下 | ほとんど不自由はない。 |
| 軽 度 難 聴 | 26dBHL～40dBHL | 聞き取りが少し困難になり、遠くの声などが聞き難くなる。 |
| 中 度 難 聴 | 41dBHL～55dBHL | 普通の会話の聞き取りが困難になる。 |
| | 56dBHL～70dBHL | 普通の会話が聞き取れない。大きな声なら聞き取れる。 |
| 高 度 難 聴 | 71dBHL～90dBHL | 耳元の大声なら何とか聞き取れる。 |
| 重 度 難 聴 | 91dBHL以上 | ほとんどわからない。 |

5. 高齢者編

(2) お手伝いのポイント

本人の希望・要望を確認

全ての高齢者の方が手助けを必要としているわけではありません。相手がどんなことに困っていてどんなことを手伝って欲しいのか、手助けを必要としている人の希望や要望の内容をしっかりと確認することが大切です。

わかりやすく丁寧に

年をとると、視力や聴力の低下により、物が見えにくくなったり音が聞こえにくくなったりします。話しかけるときのや何かを説明する際は、文字をわかりやすく大きく書いたり、丁寧にはっきりとした声で話したりするようにしましょう。

一方的な押しつけをしない

相手の自主的な意思や行動を尊重し、必要なところだけを手伝うようにしましょう。こちらが良かれと思ってやっていることが、相手にとっては押しつけのように感じる場合もあります。

相手が何を必要としているのかを確認し、押しつけにならないように努めましょう。

階段の上り下り

年をとると筋力が低下し、長い階段を歩くことや、大きな段差の上り下りがつらくなります。また、身体のバランス能力が低下するので、転んだりつまづきやすくなり、大きなけがにつながる可能性があります。階段の上り下りの際は声をかけて荷物を持ったり、斜め前や後ろから見守ったりと、安心して上り下りができるようにすることが大切です。

気遣うところ

年をとるとすばやく行動することが難しくなります。人ごみなど混雑している場所や、大きな駅などでの乗り換え、エスカレーターの乗り降り、買い物の会計のときなど、お年寄りを急かさないう気をつけましょう。

5. 高齢者編

(3) 体験プログラム例

人は誰でも年を重ね老いていきます。老化により身体の機能は低下し、さまざまな障害がでてきます。これまで当たり前に行っていた日常生活が1人だけではできなくなります。高齢者疑似体験では、高齢者の心身の変化に気づく観察力を養うとともに、高齢者や障害を持つ人の苦労や介助の仕方を理解し、思いやり・いたわりの心を学びましょう。

① 高齢者疑似体験

体験用具内容

① 耳栓

高音域を聞きづらくした耳栓をつけることで、老人性難聴に特有な聞きにくさ、耳が遠い状態を再現します。

② ゴーグル（眼鏡）

加齢によって生じる白内障による色覚変化、ぼやけて見える状態や視野の狭さを再現します。

③ 万能（荷重）チョッキ

チョッキのポケットにおもり（砂袋）を入れて、加齢に伴う前かがみの姿勢を再現します。

④ マルチサポーター

手首・足首・肘・膝の関節を固定することで筋力の衰えから起こる関節の動きにくくなる状態を再現します。

⑤ 手袋

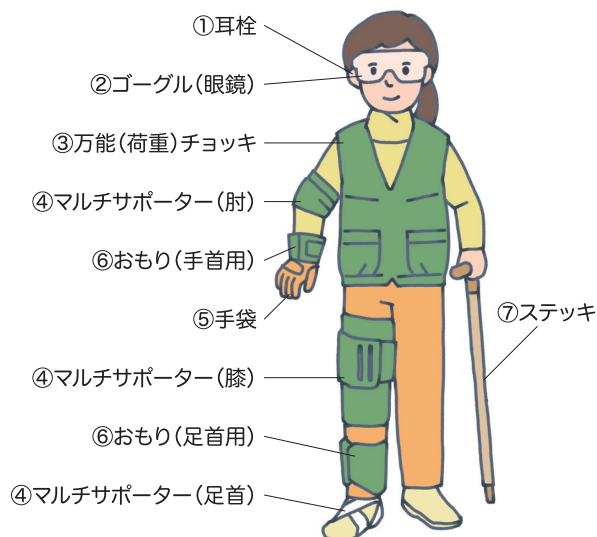
手指の触覚・圧覚、温覚などの低下により物がつかみにくい、おとしやすい状態や指先の違和感を再現します。

⑥ 手首・足首用おもり

動きが鈍感になり、不快なだるさを再現します。

⑦ ステッキ

前かがみになった身体を支えるために使用します。



はじめに

1. 人間は誰でも年をとるということを知り、理解しよう。
2. 年をとることによる身体の変化や心の変化について考えよう。

課題設定

1. 身体の機能低下を体験してみよう。
2. コミュニケーションをするときに必要な配慮を理解しよう。
3. 介助される側の気持ちを考えよう。

学習 プロセス

1. 高齢者の身体について想像しよう。
2. 体験用具を装着し「見る」「聞く」「触る」「歩く」などの基本動作を体験する。
3. 自動販売機でジュースを買う、公衆電話で電話をかける、新聞や広報誌を読むなどの体験コースを設定する。

体験の ポイント

1. 体験を行うときは、必ずグループ単位(2～3名)で行動し、1人は介助者として危険がないように見守り、もう1人はどんなところが大変なのか記録する。安全のため先生が見ているところで行うようにする。

まとめ

1. 自分の日常生活と比較して大変だったところを話し合う。
2. 高齢者と接するときに気をつけることや、工夫すべき点について考える。
3. 日常生活の中で高齢者に対しどういう風に気をつければよいか考える。

注意！

誰でも老化による機能低下はありますが、個人差があることを忘れないようにしましょう。相手の状態によって気をつけることも変わるということを知っておきましょう。高齢者と接するときは相手を尊敬する気持ちを忘れないようにしましょう。

5. 高齢者編

(3) 体験プログラム例

② その他

● ふれあい・いきいきサロンでの交流

「ふれあい・いきいきサロン」は地域を拠点に、その地域に住む住民同士が協働で企画し、内容を決め、ともに運営していく楽しい仲間づくり、居場所づくりの活動です。



【お茶とおしゃべりを楽しんでいる様子】

● 昔あそびや伝統工芸を教えてもらう

高齢者世帯や核家族化が進み、家庭で高齢者と接する機会が少なくなっている中、世代間交流をとおして、地域における伝統文化や伝統工芸等を次の世代へ引き継ぐことや、地域の高齢者の方々との交流にも繋がります。



【地域の伝統工芸しめ縄づくり体験】

5. 高齢者編

(4) 認知症について

認知症とは

認知症とは老いにもなう病気の一つです。さまざまな原因で脳の細胞が死ぬ、または働きが悪くなることによって、記憶・判断力の障害などが起こり、意識障害はないものの社会生活や対人関係に支障が出ている状態（およそ6か月以上継続）をいいます。

「認知症」と「老化による物忘れ」の違い

| 認知症の場合 | 老化等による物忘れの場合 |
|---|--|
| 体験したことの全てを忘れる 例:ご飯を食べた後、食べたこと自体を忘れてしまう | 体験したことの一部を忘れる 例:ご飯を食べた後、食べたメニューを忘れる |
| もの忘れを自覚できない 忘れていることに気がつかない | もの忘れを自覚できる 忘れていたことに気づくことができる |
| 自分の今いる場所や時間が分からなくなる | 自分の今いる場所や時間はわかる |
| 使い慣れていた道具の使い方など 今までできていたことができなくなる | 使い慣れている道具や 今までできていたことは忘れない |
| 性格や態度が以前と変わる | 性格や態度は変わらない |

認知症を進行させる原因

認知症の進行を防止するには「身体」と「こころ」と「暮らし」を見守り、小さな変化を見逃さないことが大切です。

身体・・・生活習慣病や栄養不足等になっていないか など

こころ・・・不安や孤独感が強くなっていないか など

暮らし・・・ストレスの多い暮らしをしていないか など

コミュニケーションのポイント

・本人の持っている力を引き出す

認知症になっても、年をとっても、まだ自分にできることはたくさんあります。
本人の得意なことに目を向けて、一緒に楽しみ、丁寧に話を聞くことが大切です。

・本人の習慣を活かす

食事やお茶、トイレやお風呂など、その人ごとに習慣があります。一方的に片づけたり強制的に何かをするのではなく、本人と一緒にできることをしましょう。

・好みや価値観を大切にす

好きな食べ物や遊び、テレビ、ラジオ、趣味など好きな物は誰にでも必ずあります。
また、他人からすれば不要と思うものでも本人からすれば大切な思い出の品というものもあります。⇒「できないこと探し」ではなく、「いいこと（できること）探し」を！

6. 学習のふり返し・評価のポイント

福祉教育におけるふり返し・評価のポイント

福祉教育において大切なことは、一方的な知識定着や対象理解、技術習得をすることではなく、子どもたちが福祉を他人ごとではなく自分ごととして捉え、福祉課題や地域課題に対してどのように向き合ったか、そこで何を思い、何を考えたのかを丁寧にふり返し、評価することが大切です。

● 福祉を他人ごとではなく、自分ごととして捉えているか

子どもたちに対して、いきなり高齢者や障害者の方について調べたり、考えたりするような働きかけをしても、子どもたちにとっては「自分とは関係のない他人ごと」となってしまうがちです。

まずは、子どもたちが自分自身の「しあわせ」について考え、そこから「高齢者の方にとってのしあわせは?」「障害者の方にとってのしあわせとは?」・・・というように繋がりを意識したプログラムを展開することで、他人ごとではなく自分ごととして捉えやすくなります。

● 学習の過程を通して福祉課題や地域課題にどのように向き合ったか

学習の過程において、子どもたちが福祉課題や地域課題に対してどのように向き合ったか、そこで何を思い、何を考えたのかに注目することが大切です。そのためには、全体の学習の終わりにまとめとして感想文を書くだけでなく、その学習ごとに子どもたちに感想を聞き、話し合うことで、次の学習への橋渡しとなったり、子どもたちの内面や意識の変化を確認することができます。

● 子どもたちの小さな変化を捉える

車いす体験やブラインドウォーク体験等を通して、普段通っている通学路の傾きや段差、点字ブロックの上にある放置自転車などの障害物等気づくようになる子どもがいます。また、新聞やテレビのニュースで福祉に関係する内容に興味・関心を持つ子どももいます。これらは、体験学習が子どもたちにもたらした変化であり、このような子どもたちの小さな変化を捉えることも大切です。

● 即時的・表面的な変化ばかりではない

子どもたちにとって学習した内容が意味のあるものになったかどうかは、体験の直後の場合もありますし、ある程度時間が経ったあと、何年も経過した後に見出される場合など個人差があります。

● お互いの「気づき」を確認・共有する場を設ける

学び手である子ども自身がひとりで学習をふり返るだけでは、体験による学びは深まりません。一緒に学習した他の子どもたちと相互に、またはグループでふり返し、お互いの気づきを確認しあうことも大切です。また協力していただいた地域の方々と共に体験の内容をふり返ることも、協力者にとっての新しい気づきに繋がり、体験学習の質を高めることに繋がります。